
旦那様は、オタク様！？

オオトリページ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旦那様は、オタク様！？

【Zコード】

Z0439D

【作者名】

オオトリページ

【あらすじ】

和屋杏子は大恋愛の末にジューンブライドにて念願の結婚をした。そして、愛する旦那と甘い新婚生活の日々を送っているのだが…。なんと、この愛する旦那様はオタク様だったのだ！…杏子と旦那の甘い（？）生活を少しだけ見せる笑いあり涙ありのハートフルコメディ！？

第1話・嫌になる

嫌になってしまつ。

和屋杏子は、ため息をついてしまう。掃除機を横に置きながらチラリと目の前の棚を見る。そこに見えるフィギュアの群れという群れ…。別段、杏子にそういう趣味がある訳ではない。どちらかというとクマやウサギ等のぬいぐるみの方が好みだ。

では、何故に杏子の家に、しかも自室にズラリと並んだフィギュアがあるのか。理由はいたく簡単だ。杏子の所有物でないのなら他の人間の所有物、つまり同居人の所有するフィギュアなのだ。

さて、その同居人というのが杏子にとつて何なのか…。

「はあ、旦那もねえ。も少し、こうこう趣味を控えてくれたら…」

そう、一生を添い遂げると誓つた相手。旦那又は夫と呼称する相手である。

去年の6月、つまりはジューンブライドにて杏子は大恋愛の末、

愛する相手と念願の結婚をした。

杏子の実家は江戸時代前から（実は、杏子自身いつからか知らない）老舗の寿司屋で、父親はお決まりの頑固親父。旦那を初めて見せに行つた時、色白ヒヨロヒヨロでピン底眼鏡とボサボサの髪（しかも、やたらと長い）だった旦那を見た父親は出逢つて一瞬、鉄拳を旦那に喰らわせるという事件が起きたぐらいだ。

その時の父親曰く。

『娘をくれてやるのは、男の中の男と決まつひとつ（訳：決まつている）！彼氏がいるとか言つけん、どんな男か期待しようたのに…。』（訳：こんな）優男にくれてやる物は塩でも無かつ！（訳：くれてやる塩さえも無い）』

との事で、杏子と旦那の結婚はエベレストの山頂と同じく海溝の底の距離よりも遠退いたのだった。まあ、旦那の熱心な説得と買収（？）した親戚の説得が効いて去年の6月に結婚出来たのだが…。

「オタク…。いや、知つてたけど。知つてたけど、やっぱ思わない？結婚したら私がいるから、こういう趣味を卒業してくれるつて…？」

しかし、杏子の思いとは反対に旦那のオタクリズムは加速。いまや、杏子にコスプレを強要してくる始末なのである。

「まあ、昨日奴がネコのコスプレを強要してきた時は、鼻に正拳をぶち込んでやつたけど、」

杏子は空手黒帯なのである。ただ、旦那の生命力もかなりの物で一発では諦めてくれなかつたが…。それはそれ、技の試しがけに丁度良い。お陰で技のレパートリーが日に日に増えしていく。

「結婚前より私、ぜつたい強くなつてゐる…」

「あ、掃除の続きしなきや」

杏子は両手を口元に上げ、ヒザを上げて足を上げる。それは、まるで大好きな彼と目が合ひ嬉しいけど恥ずかしいといつ感じの女子高生の様である。

今日の天気は快晴。旦那は会社だが、何だか自分と心が繋がつている様に感じる。杏子は窓を開け、入ってくるそよ風に目をつぶる。早く、帰つて来ないかな。駄目駄目でヒヨロヒヨロでコスプレを強要してくるオタクの旦那であるが杏子にとっては、やはり愛する旦那なのである。

そう、和屋家の始まつたばかりの新婚生活はまだまだ甘いのである。

る。

第1話・嫌になる（後書き）

こんにちば。

ええ、書くことがありません（笑）

とりあえず、練習用の小説なので更新は不定期です。こんな小説ですが他の作品同様よろしくお願ひします。

それでは、失礼致します。ありがとうございました。

羽ぼうきでパタパタ……。

和屋杏子は新婚さんである。去年の6月に大恋愛の末、結婚をした。だが、愛する旦那様は何と…オタク様だったのだ。

「いやあ、良いねえ。メイドに羽ぼうきで頭をパタパタされるのは…。」主人様、パタパターなんて…」

毎回、何かしらのコスプレを強要してくる旦那。今回は黒服のメイド。それを来て掃除をしてくれただけで良いからと旦那が言うので、昼間に掃除をしたにもかかわらず杏子は黒のメイド服を身に纏い掃除をする。だが、いい加減に我慢の限界である。

杏子は中学・高校と体育会系の部活に所属していた。つまり、体育会系の女の子はこうこう腑抜けた輩を見ると…。

「だああつーーお前、いい加減にしろよなー?あたしゃー、あんたの着せ替えフイギュアじゃねえんだよー!」

「デジタルのカメラでぱしゃぱしゃとメイド姿の杏子を撮っている

田那に杏子は低空ドロップキックを喰らわせる。

「ふわやあー。」

田那はドスンとの場に尻餅をつく。

「あわわわわ、杏子ちゃん？ ややや、落ち着いて」

言葉の始めを震わせながら杏子に落ち着いてくれと田那は手を前に出し体を震わせる。その田那の姿を見て、まずは、お前が落ち着けよと杏子は思つのだつた。

「たく、私はお前のフイ、ギュアじないんだぞ？ 嫁だぞ？ 奥様だぞ？」

む~っと、眉をハの字にして杏子は田那に訴える。そして、ちょこんと田那の前に座りぐりぐりと田那の胸に人差し指を押し付ける。杏子としては、ただ新婚なので甘えて訴えてみただけなのだが…。

「でたあああ…黒メイドのシンデロ状態…いやいやいやー、せつぱ、コレだよね~」

田那のオタク脳は、そつ認識せず。杏子の訴えは脆くも打ち碎か

れるのだった。ついに、ぱしゃと杏子の甘えた仕草をカメラにおさめる旦那。いやはや、杏子の怒る姿が撮れているとも知らずに旦那はぱしゃぱしゃと続ける。

「お、おま、お前なあ…。あたしの、私の愛を返せええつーー！」

愛さえ有れば趣味の差なんて…。そう思わない事もなかつたのだが、旦那があまりにも駄目男なので杏子は怒る。

全くもつて、不条理である。一人は同じ場所で同じ時間に同じ位に愛を誓つたというのに…。

要望が通るのは大抵が旦那の方だ。

ウサウサランド（市内の遊園地）に行きたいと言つても旦那の仕事をの都合で行けなかつたり、じや、別の所でデート、といつと必ず旦那お得意のオタクスピットになつてしまつ。他にも、一緒に寝たいのにプラモデルを作るからと深夜まで起きてたり、朝のキスをしたいのにせつと仕事に出掛けしていく旦那。

「なんでコイツと結婚したんだろ?」

不意に出でてしまった言葉。別に本氣で思つた事ではない。杏子にとつて、ただ、何となくの一言だったのだが。

「ふえー?ええつーーあ、ああああ、杏子さんー?うえつー?な、

何を、言つて…？いや、いやあ、捨てないで…僕を捨てないでくれえええーん…！」

杏子の不意にでた言葉にわんわんと泣く旦那。まるで、子供だ。ただ、言つている事は子供ではないが…。

「『じめよお、じめよお。もう、ゴスロリや黒メイドのコスプレを強要しないからあー。捨てないでえ。愛してるよー、愛してるんだよー。杏子がいなくなつたら僕は半日でこの世から消滅してしまうよー！…いいの？本当にだからねえ、本当に消滅してしまうんだからねえ！？良いかい、僕の脳内はもう八割が杏子に占められてるんだからねえ？それが無くなるつて事は脳死だよ？体があつても死なんだよ？現在の法律では脳死は死んでいる事にはならないけど、僕の場合は本当に死ぬんだからあああああ…』

意味不明である。旦那の言つている事が杏子にはよく分からない。だが、旦那が自分を深く愛してくれていてる事は分かる。杏子は何だか氣恥ずかしくなつてしまつ。体がむずむずとしてこそばゆい。

杏子は体育会系で強い。そのためか学生時代から杏子に近寄る男性はいなかつた。それに、杏子自身も男にあまり興味が無かつたのでより男が近寄らなかつた。つまり、杏子にここまで言つてくれる男性は家族意外で旦那が初めてであつたのだ。

自分の何処が良いのかと聞いたら『全てが』と言つてくれた旦那。プロポーションは良くても性格が男っぽいぞ、と言つたら『それは君が人一倍女の子だからだよ』と言つてくれた旦那。

「ばか…」

愛さえ有れば趣味の差なんて…。不条理さえも愛になる。そう、新婚さんである和屋夫婦、二人はまだまだ甘くてラブラブなのだ。

第2話・祭まつりで（後書き）

こんなにちは。

和屋夫婦は面白い関係にあるようで…。杏子は男っぽいけど何処か少女趣味、旦那はヘタレでやっぱりオタク趣味（笑）

そんな一人だけど相手を想い合つのは一緒。中々に良い夫婦かと

…？

それでは、失礼致します。ありがとうございました。

第3話・何を言つて

何を言つてゐるウサギさん？

和屋杏子は新婚さんである。旦那はオタクであるが、愛の前ではそんな物は問題ではない。

「妹つて、萌えるかな？」

朝方から意味の分からぬ言葉を繰り返す旦那。妹、妹？確かに、杏子には16歳になる妹がいる。いるが、『燃え』ってなんだ？杏子にはいまいち旦那の言つている事が分からぬ。

「燃え？」

「ああ、萌え！…！」

いま一人には、日本海溝よりも深い溝があるので。『燃え』と『萌え』の深い溝が…。

「妹萌え？」

「ああ、妹萌え！！」

妹のいる男は『妹萌え』が無いと言つが、どうやら、旦那には妹がいない為か今突然に『妹萌え』に田覚めてしまつたようだ。

「杏子、妹つて良いよなあ？」

「はあつーー？」

これがいけなかつた。オタク用語に『萌え』とでも言つておけば良かつた物を旦那が『妹つて良いよな』なんて杏子にも分かりやすく『妹に興味あり』と用語を訳してしまつた為に…。

「こん不埒もんがああつーー！」

朝から和屋家は賑やかである。顔やスタイルは抜群に良いが性格が何処か男っぽい嫁がヒヨロヒヨロ色白ヘタレオタクの旦那にショートレンジアッパーと首投げを喰らわせる程に、この家は賑やかだ。

「妹つてなんだ、妹つて！？お前は何か？細胞レベルが同じ位なら若い妹の方を選ぶといつのか？それとも、姉妹はセットでプライスレスかつ！？」

只今、杏子の動搖レベルは最高値を迎えてい。田那のいきなり妹萌え発言、杏子による解釈は妹好き発言だが。まあ、ともかくにも杏子は田那の心が自分から離れたと思い大混乱である。

「浮氣者、浮氣者、浮氣者おー。何だよ、何なんだよ。お前が私の事を好きだって言つたんだりおー何で今さら妹なんだよおー…わーん…！」

杏子はぽろぽろと涙を流す。もはや、彼女には田那を怒る気力もない。ただ、少女のよつこ泣きじやぐのだった。

「あー…、いやいや」

口のむ田那。彼はこきなり泣き出した杏子に田那がつてこるようだ。一体、何が彼女を悲しませたのか、彼には理解が出来ないでいるらしい。

「ひっく、ひっく、ぐすつ。…つ、わーん…」

一向に泣き止む気配のない杏子。さて、どうしたものかと田那は

腕を組む。何故、杏子が泣き出しだのか。今日は仕事がなく朝方から一緒にであるが、まさか、それが原因かと田那は考える。いや、それにしては朝はとても機嫌であった。その為、杏子はおはようのキスから他愛のないキスを何度も求めていた。では、原因は何だ？

「妹がにじやんだああーー私りやー、ダメなのかああーーふわーんー！」

妹！？ああ、なるほど。田那はよしやく杏子の不満とする事を理解したらしく、せつと、泣きじやぐる杏子に近づこうとする。

彼女は自分の『妹萌え』とこの発言にショックを受けたのか。全く、そういう事ではないといつて。田那は優しく杏子を包む様に抱き込む。

「杏子、そういうじゃないんだ。君の妹さんが好きとか嫌いとか、いや、妹さんは好きだよ？好きだけど、それは家族としてつて理由であつて」

田那は優しく杏子に自分の気持ちを語る。ここまで勘違いをしてくれる杏子の愛を感じながら、ゆづくつと『妹萌え』発言について

「つまり、俺が言いたいのはね」

旦那はすくっと立ち上がり、真っ直ぐにタンス棚へと向かう。ごそじそと向やら向かを取りだしていくようだ。

「やつ、俺が言いたいのは、コレ……」

「… なにそれ？」

旦那の優しいハグ（抱きつき）によつ少し気分が落ち着いた杏子。旦那が出したものを怪訝な表情で見る。それもその筈、旦那が出してきたものは何やらフリフリの付いた洋服一式。おおよそ、杏子が着ないであろう少女趣味の服である。

「つまりね、妹萌えに旦那めた旦那様は杏子にコレを着て欲しいのですよ」

「ハーフヒ笑い。旦那は少女趣味の洋服を杏子に差し出す。

それを見て杏子はため息をつく。浮氣だ何だと騒いでいた自分が情けない。そもそもこの旦那に浮氣をするといつ甲斐性がある訳が無かつた。

「杏子ちゃん……ああ、レッツ・妹萌えプレイ……！」

新婚さんである和屋家は朝から賑やかである。そつ、突然に『妹萌え』に日覚め最愛の妻に妹系のコスプレを強要する旦那に、またかと呆れ果てた妻が投げっぱなしジャーマンを放つ程に、新婚さんである和屋家は賑やかである。

第3話・何を書いて（後書き）

こんなにちほ。

第3話田です。練習用と言つておつますが、ちやんと練習になつてゐるのかやや不安です（笑）

さて、杏子と田那の物語りなのですが。どうでしょか、こんな田那？私だったら間違ひなく願い下げで「やれこます（笑）」だつて、やりたい放題ですよ？杏子はよく我慢出来るなあ、と感心するばかりです。まあ、田那は田那で杏子にかなり依存している所があるので、杏子を幸せにしたいと日々努力しているのでしょうか…。というか、もう少し趣味を控えれば良いのに（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

和屋とこう苗字は、田那の方の苗字。つまり、杏子は和屋家に嫁いだところ事に…。

第4話・旦那の仕事

旦那の仕事を知らぬは、嫁の恥！？

という訳で和屋杏子は旦那の仕事場を訪れた。まあ、ただ家に一人でいるのが淋しくて旦那に会いに来ているだけなのだが…。それは内緒である。

「北条、相手先に連絡入れといてくれ。関内はこの書類の書き直しをよろしく！」

そう言つて旦那はきびきびと働く。なんと言つかもう、格好良いの一言である。杏子は旦那の仕事ぶりを見てぼーーとなってしまう。家ではだらしなく、服を脱ぐのにも杏子に手伝いをして貰っている旦那。しかし、今は部下を従えて大きな仕事を一挙に任せているやり手の会社員である。

「和屋専務、先方から例の事で話があるといま下に来てるそうです

が？」

「先方？先方、先方、先方！？…ああ、長田か！？たく、あの会社
まだ話たりないのか？しつこいなあ…」

専務という役職につく旦那。専務という役職がどんなポストな
か杏子には分からぬ。分からぬのが旦那のお給金からみて…たぶ
ん、かなりの上の位に思える。思えるが旦那の仕事は激務だ。杏子
は会社という物は上に行けば上に行くほど楽になると思つていた。
しかし、旦那の働きぶりを見る限り樂には見えない。

「杏子、悪いな。昼飯はもう少し後になりそつだ。俺も早く昼休み
に入りたいんだがなあ…」

そう言い旦那は杏子の頭を撫でる。旦那は仕事現場では一人称が
自宅の『僕』から『俺』へと変わる。というか、杏子と居るときは
大体が『僕』という一人称なのだが…。激務の中、旦那の一人称は
『俺』のままである。

「うーうん、しょうがないよ。私は大丈夫だから…」

そう言い杏子は首を横に振る。旦那の優しい笑顔。凜々しくて逞

しい、仕事場の旦那。その中の旦那の優しい笑顔。杏子の胸の鼓動は止まる事を知らない。ドキドキと激しく鼓動が鳴り響く。

いま自分はどんな顔をしているのだろうか？杏子は自分の顔が真っ赤になっている事に気付いていた。だから、もつと凄い事になっているのでは、と杏子は心配する。旦那は知つてか知らずか杏子の頬をそつと触り、仕事に戻る。

旦那の仕事はやはり激務である。

時計は午後1時半を回る。この旦那が働く会社の昼休みは午後1時半から始まり午後2時に終わるという極めて珍しい会社である。

「いやあ、あと30分しかないよお？」

旦那はケラケラと笑いながら杏子の手を握る。

「仕事…忙しそうだね」

あまりの田那の働きぶりに、杏子は淋しくて会いに来た事を恥ずかしく思つ。田那はあんなにも頑張つていた、しかし、自分はどうだ?ちょっと淋しくなつたからとこつと家事を投げ出し田那に会いに来てしまつた。嫁として失格である。杏子はとぼとぼとビジネス街を歩く。

「あれ、うしくないなあ…杏子ひやん、杏子ひやん、杏子ひやん?」

もしもーーーと田那は杏子の顔の前で手をヒョコヒョコと振る。

「んん~?杏子は何が食べたい?和食?中華?洋食?」

杏子とは対照的に、田那は笑つて田那。先程までの凛々しく逞しい田那とは別人のようである。

「そうだ、杏子はオムライスが大好きだったよね？ここいらに上手い洋食を食わせるお店があるんだよ、行ってみない？」

そう言い旦那は杏子の手を引っ張り走る。それは時間が残り30分だからではない。杏子が何故か暗くなっているから。だから、旦那は杏子を引っ張り走るのだった。

新婚さんである和屋家の旦那。彼は仕事に一所懸命であり情熱を持つている。だが、それ以上に彼には一所懸命、いや、一生懸命な事がある。それは生涯愛すると誓つた相手。和屋杏子を幸せにする事。そう、和屋家の旦那は杏子にメロメロなのである。彼女の笑顔の為ならば全てを捨ててもよいと考える程に…。

第4話・旦那の仕事（後書き）

こんにちわ。

旦那の会社登場。ただ、何の会社かは不明（笑）

さて、更新不定期とか言いながらも第4話目です。小説の書き方が上達したかどうかはさて置き、和屋家の熱々度（ラブラブ度？）は上昇しつばなし。

今回は旦那の方にもスポットが当たっています。旦那がどんな人間なのか、杏子をどう思っているのかが分かる話になつていています。

それでは、今回はこの辺りで失敬致します。ありがとうございました。

和屋家の旦那はエリートさん？ただ、杏子の前では駄目夫？（笑）

浮気とは…

・心がうわついていること。心が落ち着かず、変わりやすいこと。

・陽気で派手な気質。

・男女間の愛情が、うわついて変わりやすいこと。愛情なこと。他の異性に心を移すこと。

：：：：：：：

「浮氣？お兄さんか？」

「…りん」

綺麗に掃除された部屋。フローリングの床には地味ながら高級感溢れる絨毯が敷かれている。そして、いまだ片付けられることの無い、冬特有のコタツ。綺麗に掃除された部屋であるものの、4月になつたばかりだというのに和屋家には春らしい部屋模様は一切見られない。

「ま、またまた～？お兄さんが浮氣だなんて杏子お姉えわ～…。だつ、だつてだつて、お兄さんはお姉えにいつもベッタリだつたじやないですか？…もつ、そりや、ウザイくら…」

セーラー服を着た少女はそう言いパタパタと手を振る。しかし、杏子は俯いたまま一言も話しあしよつとしない。どうやら、[冗談ではないよ]うだ。

「な、なんでそう思つたですか…といつか、浮氣（～）してゐつて
気付いたのですの…？」

「…けえーたい」

「けえーたい？…携帯電話？」

「旦那のケータイを見てたら…スケジュールのところ『アイルヤ
んど、はーと』って書いてあつた…」

「（アイルヤ…何、その名前？本名？本名なのですの？かなり、
そちら系の名前なんじゃ…？はつ、フーゾク！？まさか、お兄さん
フーゾクに通つちやつてるですか？えつ、え？お兄さんお兄さんお兄
さん…？）」

セーラー服の少女は杏子に聞こえないように小声で何やらぶつぶつ
と呟く。姉の旦那はかなりのオタクだ。だから、アニメやゲームの
女性に現を抜かすことはあっても、まさか、現実の女性に現を抜か
すことは無いと姉も自分も思っていた。

と、いうか。姉と結婚する際に自分たちの父親である頑固一徹寿司屋のヤクザ親父に初対面で殴られ、結婚の挨拶で日本刀を突き付けられ、式後で視線だけで人が殺せそうな睨み付けを喰らうという、障害を越えてまで手に入れたはずの姉を裏切るなんて……自分も含めて誰も思つてみなかつたことである。

（んん~、でも、これで分かつたです。何故、いつも明るくて幸せいっぱいだったお姉えの家が、こんな冬越えが出来てないような位に暗くなっているのか……）

少女はコンビニで買つてきた板チョコをパリッと一口食べるとスクリンと立ち上がる。

（私が……私が明るくて幸せできらきら輝いていた杏子お姉えとお兄さんの結婚生活を守らなくちゃつ、です……そうなのです、この私、柏木七海が、私の理想の夫婦であるお姉え夫婦を守るですのヨ！…）

和屋家の妹・柏木七海かじわき ななみ16歳。只今、探偵見習い・修行中。

まず、探偵といえば…

「ユ サクですよ、ユウ ク！やつぱ、私立探偵つていたらユ
サクさんしかないですよ、部長！」

「うへ、うつさいですよ、阿久津くん！ ウサク、ユウサ つて、
あの人は探偵というより警察の方が有名です。なんじやこりやーっ
が有名なんですよ！」

和屋家の妹・柏木七海かじわき ななみは、看板の影に隠れながら同じクラスで同じ
部活の阿久津あくつ 当夜とうやと探偵について語らつていた。

「まったく、分かつてないですの。ユウ ク先生は憧れても、真似
しちゃダメなんですよ、阿久津くん。あの人は役作りの為に自分
足を切っちゃおうとした人なんですよ？私たちに真似なんて出来る

訳ないです。特にヘタレキング・阿久津当夜くんにわ…

「ヘタレで…キングで…。俺、この部長に着いて行つて大丈夫なんだろうか…」

「あつ、動きました。監視対象が動きだしましたよ、阿久津くん！何をそこで地面に話しかてるんですか？探偵といったら尾行ですよ、尾行！我が神社高校・探偵クラブの出番です！」

「て、部長の姉夫婦の旦那浮気調査でしょ？他の皆は近所で起きた窃盗事件の方に行つちまいましたよ？つきしょく、ジャンケンで負けなきや、俺も向こうで色々と…部長と一人つてのがどーもなあ…つ…」

「いいから、ウ・ゴ・ク・です…！」

七海の姉夫婦はとても仲が良く、七海にとつて理想の夫婦であり、その姉夫婦の住む家はとても居心地が良かつた。常に清潔で、いつも爽やかな風が入つてきていて、空間がそこだけ異世界のように幸せに溢れていた。

小さい頃からガサツで、男勝りで、おおよそ料理や掃除、洗濯なんて女らしことをしたことの無い姉。しかし、結婚してからはそれが一変して毎日毎日、家を掃除して、料理をして、洗濯なんかして、それはもうお嫁さんとしては完璧であった。人は変われば変わるものだなあと七海自身をうつ思つべらじだった。

掃除嫌いだった姉は部屋の模様変えなんかも、季節毎にやっていて、春なら春らしく夏なら夏で秋なら秋で冬なら冬の内装に飾り付けていた。何が嬉しくてそんなに部屋を季節毎に模様変えするのか。きっと、これが不器用な姉の旦那さんへの愛情なんだろうなーっ、と七海は感じていた。

そして、数日前、七海はそんな幸せいっぱい春いっぱいの姉夫婦の家に訪れることとなつた。当然、姉は春になつた今、部屋を春らしく飾り付けていると思い、やつて来た七海。だが、なんと驚いたことに内装がいつもと一緒に冬の内装であるではないか！？

先ほども言つた通り、七海の姉は結婚してからとつもの部屋を季節毎に模様変えをしている。しかし、いまは4月。春になつた今、いまだ家が冬の内装といつのはどういふことなのだろうか？この異常事態に七海は驚き、姉である杏子に一体これはどういふ事なのかと問いただした。

「なるほど。で、部長がお姉さんにそれを聞いたとしたといふ、旦那さんが浮氣をしてこむ、と…？」

「ですー。」

「で、それを聞いた部長は我が探偵クラブを私的に利用して、旦那さんを調査しようと、尾行してこむと…」

「ですー。」

「……………部長、旦那さん、見失いましたけど？」

「ですーーーっーーー？」

：：：：：

⋮
⋮

見失った姉の旦那を探すこと数十分。携帯電話を調べ、居場所を特定した七海。

「……なんすか、ここのオタクの聖地は……」

「あ、秋葉原では無いですよ……ね?でも、玩具やゲーム、フィギュアや……Hログッズ!?」

「Hログッズって部長。あれは、恋愛ゲームですよ、恋愛ゲーム。しつかし、知らなかつたなあ、こんな所にオタク道があつたとは……」

「えつ、何?オタクロード?」

「いや、俺の仲間内で言つてるだけなんですけどね?アキバ以外のオタク街の事をそう呼んでるです。アキバがオタクのメツカつて事はそのメツカを辿る道がある訳でしょ?だから、アキバ以外のオタク街をオタク道つて事で……」

「辿るですか？オタクは皆、その道を辿ってアキバを目指すですか？」

「いや、そんな西遊記みたいな…。別に辿ってアキバに行くんじゃなくて、アキバ以外をそう呼んでる訳で…」

そう言い阿久津はキヨロキヨロと周りを見渡す。そこいら中にオタクが泣いて喜びそうなグッズを売る店が所狭しと並んでいる。アニメやゲームのポスターが店先で貼られているのは当たり前で、マニアックな店では子どもにとつて悪影響だらううとシッコリたぐるようなポスター等も貼られていた。

「んん~、お兄さんのケータイを調べて位置を特定したはいいけど、まさか、こんな所にいるとはです」

「かなりのオタクですね、部長のお兄さん」

「義理ですけどね…」

ふう、と七海はため息をつく。まつたく、あの義理兄ときたら姉を困らせてばかりである。とりあえず、街のトロトロなポスターを横目に義理兄を探すことにする七海。

となりの阿久津は、といつと『おお、すげえ、これ幻の同人ゲームじゃね?』、『やべつ、今日つて京都瞑想の発売日だつたんだ!?』、『げえ、なんだよこのフイギュア?かなり、クオリティー高くね?表情とかマジ自然!』などといつたわ言を言つて義理兄を探す気がないようである。

人選を間違えた。七海は義理兄の影を追いながら心の底からそり思う。

阿久津はこう見えて学校での成績は優秀で探偵としての能力も、難解な事件にて警察から直接アドバイスを求められるほど優秀であった。そんな彼だからこそ義理兄の浮気調査に役だつてくれると思っていたのだが…。

「おおつ!/?スゲエ、アレは破格の値段で異例の売り上げを記録した、超激レア1/8禁 P Cゲーム『アイマシテ』じゃねえかああつ!/?やつぶえ、アレってあまりの人気にどこも売り切れだつたんだよな、買わにやならん、男として、アレは買わにやならんだろう!?

「?

「（人選を間違えた…です）」

第7話・帝王・柏木七海！！

「しかし、お兄さんはどうしてゐるのですの？準・秋葉原を徘徊しているのは確実なんですか？」

「うえつ、あればカードリスト修羅のレアカード！？」

「！」こつは、探す氣がゼロですの……」

準・秋葉原街に来て一時間後。浮氣容疑のかかっている七海の義理兄はいまだ見つからない。

「むいーつ！なんですの、このオタクオタクした道は！？ムカつくです、瘤に触るです！なんですの、この猛乳娘つて！？乳があるからって有り難がっているんじやないですの！乳が無くても女の子は女の子ですのーつ！オタク嫌い、オタクキモい、オタク暗いですのーつー！」

「いや、オタクが悪い訳じゃ…」

「ウルサイですの、オタクキング！略して、オタッキン！」

「ヘタレキングからオタクキングにーーつーー？…いや、いいかも。むしろ、それがオッケー？」

「何を悦に入ってるのですの！？オタッキンが嫌なら、ハゲちゃびんですーーつーー！？」

「グレード下がつたあーーつーー！？部長、オタッキン、オタッキンでお願いします。てか、俺、ハゲてねえーーつーー！」

何やらきやーきやーと騒ぐ七海と阿久津。周りのオタクたちは一人を居た堪らないといった感じで暖かい視線を送る。きっと、オタクたちは一人の姿を見てこう思つたのだろう。

学生服のカッフルがあまりのオタク文化にカルチャーショックを受け、混乱しているんだ。そうだ、そうに違いない。そつと、そつと、しておいてあげよつ……と。

「あつ、この猛乳娘くださーい！」

111

「部長、オタッキンで、オタッキンでお願いします。何なら、オタッキーでも可でつて……部長?」

七海はあまりの出来事に動くことができない。じじまとあるオタク

道。阿久津いわく、オタクのメツカである秋葉原以外のオタク街をそう呼んでいるらしい。シルクロードとかと勘違いしていると思われる。そして、そんな中。そんなオタク溢れる道で七海は信じられない物を見る。

「ふふふん、ふふふん、ふふふふん。お休みはー、買い物をして、ストレス発散、発散！今日は、猛乳娘を、買いましたーと…」

そこに居たのは紛れもなく七海の姉・和屋杏子の旦那様である和屋宗一郎、その人であった。

彼は事もあり、貴重なお休みを使って、嫁である七海の姉・和屋杏子とデートするでもなく、嫁である七海の姉・和屋杏子の為に宝石の類いを買うでもなく、なにやら如何わしいパソコンゲームを買い漁りに来ていたのだ。しかも、買ったのは七海が先ほど、タイトルやコンセプトに激怒した猛乳娘。七海は心の底から思う。

(此奴、どうしてくれよつかつー？)

この男の浮気疑惑を晴らす為に自分が部長をしている探偵クラブを私的に使用してまで浮気調査を決行したというのに…。猛乳娘を買

いましただと？お休みは買い物をしてストレス発散、発散だと？ふふふん、ふふふん、ふふふふ～んだとおおおつ～？

七海の怒りは限界寸前。阿久津はそんな七海の憤怒の表情を見て、なにやらオロオロとうろたえ気味である。

「ぶつ、部長、な、なな何かのみ、飲み物を買いますね？」
「！？」

「炭酸なら何でも良いですの？…」

「うわわ～い！じゃ、そそそこの自販機で買つたきますねね～」
…」

あまりにも恐ろしいオーラを発する七海から逃げるべく阿久津は素早い動きで田の前のゲーム屋に置かれた自販機へ向かう。

「ええと、百円、百円。しつかし、何を怒つてんのだ部長？わかつんねえー、んん～、あんな時の部長には近づかない、オア（もしくは）、「機嫌を取る！これに限る、うん、うん！」

それから、『』の今後の命を保証する為に、彼女の『』機嫌を取つてお
くべきだと、無類の炭酸系ジューク好きな彼女の為に『』一ヲ一本
仕入れようとする。

「…つと、百円見つけ、て、うおつ！？俺の百円が落ちちました？
こら、待て俺の百円！」

だが、その時、阿久津愛用の細長の財布から百円硬貨が見事に飛び
出し、アーチを描いて地面に着地。その後も縦に着地した為に『』
『』と転がる百円硬貨を追つて阿久津は一步、二歩と足を前に出す。

「…と、ホイ、百円」

「あつ、ありがとうござります」

すると、その落とした百円を拾い上げ様と阿久津が手を伸ばしたと
同時に何者かの手が百円を拾い上げ、ポンとそれを阿久津に渡した。

それはなかなか背の高い男性であった。しかし、髪の毛は前髪が目

を隠すくらいに長く、今どき珍しいビン底を思い浮かばせるレンズのした眼鏡をかけた男性だ。

「おや、君が持っているのは、もしかして、あの破格の値段で異例の売り上げを記録した幻の同人ソフト『アイマシテ』ではないかい！？」

「あっ、分かります？ 今さつき、そこのゲーム屋にあつたんですよ！ いつもいつも探してたんですけど、どこも売り切れで、偶然見つけて衝動買いしちゃいましたよ？ 男ならこれは買わにゃならん！ って思いまして、あはは」

「うんうん、分かる。分かるよ、君の気持ちー俺も探したもんだよ、て言つても手に入れたのは最近なんだけど、そのソフト。かーなり、凄いよ？」

「まつ、まじですか？」

「うん、俺さ、幼なじみの香月美代までクリアしたんだけど、かーなり泣かせる！ 他の娘の話もマジ泣き必死のストーリーだから～～

「うわあ～、やぶえ～、早く帰つてやりてえ～！」

阿久津はジタバタと地面に足踏みをする。にこやかに笑う男性はそんな阿久津に色々とゲームに関する話をし、阿久津はその話の一つ一つに感嘆の声をあげて叫ぶ。

すると、ふと、阿久津は何やら背中を刺すような視線に気付く。このプレッシャーは一体！？阿久津は背中に背負う恐怖心にも似た感覚を心に押し込め、ゆっくりとプレッシャーのする方向に顔を向ける。

「（ア～ク～ツ～ク～ン！…）」

恐怖！？

まさに、その一言に呑みかかる。一体、何が起こっているのか？学生の身ではあるものの探偵として数々の事件を解決してみせた自称名探偵・阿久津当夜だが、しかし、これは理解出来ない。

何故なのか、しかし、それは確かに具現化する事実であった。先ほどから恐怖で空間を支配する部長。その部長が更なる恐怖を持つて、見たこともない怖い表情でこちらを見ているのだ。

（ひひいい！？何が、何が、何が部長をあんなにも怒らせいるんだー！？）

これには冷静さを欠かない阿久津でも無惨に取り乱してしまった。学校では、その愛らしさとクールな仕草からクールプリティーやら愛玩の（女子の間で部長は仔猫扱いなのだ）プリンセスなどと呼ばれている彼女。しかし、中学時代からの付き合いである阿久津にとって、そんな名前は彼女には相応しく無いと思っていた。

確かに、彼女は可愛い。それはそれは、絵本の童話に出てきそうなお姫様みたいな姿で、まさしくプリティープリンセスといった感じだ。しかし、阿久津は知っている。神社高校探偵俱楽部の部長・柏木七海の心の内には秘めたる帝王が棲んでいる事を…。

帝王とはつまり、『カイザー』。王、『キング』とは違い、己の道をただひたすらに突き進むが絶対主である。その為ならば、親しきものだらうと邪魔な者はその暴虐の名の下に排除する。己の障害・敵となる者を徹底的に滅しようとする。それが『カイザー・帝王』である。

そして、そんなカイザーが柏木七海の心の内に棲んでいる。それ故に彼女を怒らせるという事は、果てしない苦しみと痛みを味わう事となるのだ。

現に中学一年の夏休み。阿久津は彼女に、彼女の苦手なカエルを触らせると、ちょっとしたイタズラをしてみせた。当然の如く、カエルが嫌いな彼女は今にも泣きそうな叫びと共に逃げ惑つた。イタズラは大成功であった。

だが、しかし、その翌日の朝。阿久津はその仕返しとして、思いもよらぬトラウマを植え付けられる事となつたのだ。『真夏の田んぼとカエルの卵』、これが阿久津当夜が一生背負つていくであろうトラウマのキーワードである。

（何故だ、何故に部長は俺に、ガンガン殺さうぜ！…みたいな視線を送り付けてくる！？お義兄さん探しを手伝わなかつたからか？いや、しかし、手伝わなくてもそもそもこの事件の真相は…）

「ん？ どうした少年？ 汗なんかかいて？」

「いへつ、なつ、なんでもないです…」

「そうだ、少年、ちょっと俺に付き合わないか？ いま、ゲーセンにいいアーケードゲームが入つてんだ。今日、俺、それをする為にここに来たんだ」

「いえ、そんな、俺、用事がありますし……」

阿久津は心の中でひたすらに叫び続けていた。まずい……本当にまずい。これ以上、この男性と長話をして部長を怒らせるとマズイことになる。そして、このまま、この男性に付き合い、ゲーセンにでも行こうものなら……。自分は、一生ゲームが出来ないであろうトラウマを植え付けられることになる。阿久津は本気で心の中でそう思う。

「ん、もしかして、他人だからとか気にしてる？馬鹿だなあ、オタクは皆同志！遠慮することはないってえー」

（違つチガウ、遠慮じやない、遠慮じやない！くそー、なんで俺がこんな目に？原因は？部長を怒らせてしまつた原因はなんだ！？）

「あつ、名前教えるね。俺の名前は和屋宗一郎っていうんだ。ちなみに、去年の6月に結婚して、只今新婚生活を満喫中さーつー！」

（原因はなんだ、原因はなんだ、原因は……和屋？……あれ、確か、部

長のお姉さんの名字も和屋？てか、あれっ？もしかして、この人。眼鏡かけて髪の毛を下ろして顔がいまいち見えにくいけど……さつき部長のお姉さんの家の前に立っていた、旦那さんじゃね？）

阿久津は混乱していた。

先ほど部長のお姉さん宅前で見た、旦那さんはちゃんとスースをビシッと決め、前髪も上に上げ、エリートビジネスマンをも思わせる出で立ちであった。しかし、何がどうなったのか、今自分の目の前にいる旦那さんはアニメのロゴと絵が描いてある服にジーンズと猛乳娘が入ったビニール袋を抱えた、まるつきりオタクなスタイルなのだ。

「てつ、猛乳娘えええつー？」

「えつ？あつ、うん。いま、この店で買つたんだけど……？」

（分かった…。いま、部長が何故にあんなに怒つた表情をしているのか…やつと、原因が理解出来た。つまり、つまり…）

阿久津はフランフランとおぼつかない足つきで和屋家の旦那から離れ

る。『えつ？ ちょっと、どうしたの？』と和屋家の旦那。阿久津は叫んでいた、心の中で氷解した事件の原因について叫んでいた。

（原因は「コイツだああああーっ！—！」）

第8話・列伝！和屋杏子！（前書き）

第7話からいきなり話が飛びますが、繋がっています。とりあえず、杏子と田那の今昔物語り！

最初の出逢いは高校時代。最初に旦那と出逢ったときに感じた感覺はとても『変』な感覺だったことを覚えている。

「結婚しよう」

これが私、和屋杏子の人生を大きく変えた一言であった。その言葉が言われたのは、旦那である和屋宗一郎が当時、大学一年生で私は高校を卒業するかしないかに差し掛かった所の時であった。

旦那との出逢いは、別にロマンチックでも何でもないただの家庭教師と生徒の関係。私が部活に夢中になるばかりに勉強の方が全く着いていけず、高校二年生の時に留年をしそうになつた為に、家庭教師として旦那がやってきたのだ。

初め、旦那はやる氣のあるのかないのか分からぬといつた感じで私に勉強を教えていた。まあ、その時の私もその方が楽でいいやと思っていたのだが、突然、旦那は私に聞いてきた。

「君、夢つてある?」

当時の私の反応は『何、言つてんだ、このジジイは…?』て感じ。しかし、田那はかなり本気だつたりじつに私に夢があるかと聞いてきたのだ。

どうやら、当時の田那は私がやる気のなさそうに勉強をしていたから、自分もそんな私のペースに合わせ勉強を教えていたらしいのだが、あまりにも私がつまらなさそうにしていたのが気になつたらしく。私の興味を引くために、夢はあるかと聞いてきたらしいのだ。

当然、当時の私には夢などなかつた。目標としては高校の空手大会で三年連続優勝を目指していたが、留年するとなると話が別になつてくる。そのために私には確たる将来の夢というものがなかつた。

「まつ、そうだな。あたしに好きな事をやらしてくれて、食わしていつてくれる田那でも見つける」ことが夢かな?」

これが、あまりにもじつにじつに夢について聞いてきた当時の田那へ言

つた言い訳の夢である。

「なるほど。でも、そんな奇特な男性は地球のどこを探したつてい
ないだらうね？」

「はん、どうかな？ あたしは今はガサツに見えるかもしねないけど、
ちゃんとすればそこそこの女に見えるのさ！ だから、ちゃんとすれ
ば、あたしを食わしていってくれる旦那なんて、すぐ見つかるさ！
？」

「こつ？」

「あつ？ だから、ちゃんとすれば現れるつて言つて」

「そりじゃなくて！ いつ、君はちゃんとするんだって」と？ 留年
してから？ 空手大会で優勝してから？ それとも、人生の最後でひと
りぼっちになつて死んでしまう時！ ？」

「はつ？ 何、言つてんのアンタ？」

「いつかする、いつかする、そんな事を言つて何もかも後回しにしていたら人生は暮れてしまうよ？ちゃんとすれば、君の好きな事をさせて食べさせてくれる旦那さんは現れる。でも、つまりそれは、ちゃんとしないと現れないって事だろ？勉強だってそう。いつか、いつかって後回しにしていたら物覚えの悪い年寄りになつてしまふ。今なんだ、するべき時は一思い立つたらとまでは言わないでも、早めにしておいて損することはないと思う。逆に後回しにすればするほど、人生を損することになる」

驚いた。今までやる気のない家庭教師だと想つていたら、実はその逆。この旦那は熱血教師だったのだ。

それ以来、私と旦那はよく口喧嘩をするようになる。価値観も違えば、性別も、生活の場も違う。だけど、当時の私にとつてそんな口喧嘩の出来る旦那はとても安心出来る存在だった。

真面目に私の事を考えてくれて、真面目に私と正面切つてぶつかつてきてくれる。気付いた時には私は旦那に恋をしていた。

いつからなのか。当時の私には分からなかつた。と、いうか、まず当時の私は恋という感覚すら知らなかつたのだ。最初に会つた時の『変』な感覚がどんどん大きくなつてきて、次第に私の心臓の全てを押し潰そうとしていた。

これは、あとから妹の七海に聞いた話なのだが、私が旦那と初めて会つた時から、どうやら私は初対面の旦那に対してかなり高圧的だつたようだ。これは私が思うに最初に感じた『変』な気持ちが恋という感情だということを理解できなかつた当時の私が、ただただ、そんな思いをわせる旦那に噛み付いていつていつたのではないか。

そして、そんな私がその『変』な思いが恋だと気付くのには、かなりの時間がかかつた。そして、それが恋だと気付くきっかけを作つたのが、旦那のプロポーズの言葉であつた。

成績もそれなりの物になり、ちゃんとした大学にも推薦で入れて貰えることにもなつた高校三年の夏。皆が必死に受験勉強をしているなか旦那のプロポーズに私は顔を真つ赤に俯いていた。

ショワショワショワとセミが鳴く、暑いあの日。

「なんで?なんで、あたしにそんな事を言つの?」

「なんでっ…いや、その、杏子ちゃんの事を好きになってしまつたから…。いや、本当は言つべ事じやないつて分かつて。大学一年生にもなつて女子高生にプロポーズなんて非常識だし、犯罪だし、变态だつて事も分かつてる。…でも」

「でも？」

「君と一緒にいる内に気持ちが抑えられなくなつてしまつてきて…。ははっ、実はさ、今だからついでに言つかけやつた…。」田嶋れつてやつなんだ……」

「そんな素振り、一度も見せなかつた…のに?」

「いや、そんな素振りを一度でも見せたら、俺は杏子ちゃんの家庭教師をクビにされちゃうよ!」だから、一生懸命バレないよう隠してた…出来れば、杏子ちゃんが成績を上げて、大学に推薦で受かるくらいになるまではつて…。それで、それが出来たら、そのまま、家庭教師を止めて…」

「止めて、あたしの前から居なくなつて…?」

「……うん」

「ふわひ、ふざけんなよ、テメエ！？止めて居なくなる？あたしに何も言わずに？そんな事したら、お前をじりまでも追つてこつてギツタギツタのボツ「ボツ」の」

「いや、だから言ひたじやん。まあ、結局、俺は君にこの気持ちを伝えずには消えることが出来なかつただけの話なんだだけじね。ははは、君に毎回毎回、偉そうなこと言つて、結局俺が一番駄目な人間だつた……。」メンね、俺の言つたこと、全部忘れて。家庭教師も君のお母さんと今日限りで終わりにしますつて言つてあるんだ

「はあ？何、勝手なこと言つてんだよ？あたしの事が好きなんだろ？あたしと一緒に居たいんだろ？だつたら、居ればいいじゃないか？私と一緒に居ればいいじゃないかつ！？」

「それが出来たら、俺はこんなに悩まないよ……」

正直、今でもあの時の旦那の気持ちが理解出来ない。好きならば、迷わずに好き合ってしまえば良いのに…。ただ、当時の旦那はそれを良しとせず、そのまま、私の前から姿を消してしまった。

「ふざけんな。ふざけんなよ、あの野郎！？」一因惚れのくせに、ヘタレのくせに、臆病者…臆病者…臆病者おおおーつ…！…思い…知らせてやる。思い知らせてやるんだから、あの馬鹿に…あたしは、あたしはー、あたしはーつ…！」

さあーつ、その後が大変、大変。

ちゃんとした大学の推薦が決まっていた当時の私は、なんと、その大学への進路を蹴ってしまう。もちろん、母親にも頑固一徹寿司親父にも怒られる始末。しかし、当時の私には確たる将来の夢があつた。だから、真っ直ぐ真っ直ぐ、夢に向かつて突き進んでいく覚悟なのであつた。えつ？どんな夢かつて？そりやあ、決まってるでしょ！？

「あたしの夢は、あたしの好きなように口をさせてくれて、あたしを食わしていくてくれる、素敵な旦那さんをゲットすること…！…さしあたり、あの馬鹿のいる大学に合格すること…！…あたしの目標だあーつー！」

うん、後半に続く！！つと（笑）

第9話・列伝！和屋杏子！（後編）

あれから、数ヶ月後。不良で、空手の部活ばかりしていて、成績不振で、男な女の昔の私はついに念願の大学に入学をした。

そう、私は推薦の大学を蹴り、母親と父親に怒られながらも、念願の大学に入れたのだ。

当時、高校の担任をしていた先生からは、奇跡だ、奇跡が起きたとか、仲の良い親友からはアンタ良く途中で投げ出さずに勉強したわね？とか言われた。

だが、当時の私にとって、そんな事はどうでも良いことだった。だつて、当時の私の夢は何も大学に入ることでは無いのだ。私の次の目標、そう、将来の夢はその先にあるものだから。

全国的にも水準の高い、七草大学。海外からの先生や留学生も多く。社会的によく採用される大学の生徒N.O.・Iとまでされる優秀な大学である。スポーツも盛んで、割かし大会での優勝率は高いようだつた。

「ん~、でも、やっぱ、アンタよく途中で勉強投げ出さずに頑張つ

たわね？あたしゃ～、嬉しいよ～小・中・高・大学とアンタと一緒に通えるなんて、うんうん、杏子、アンタ、本当によく頑張った！」

「いや、「美に嬉しがられても…」

「なにおつー？」の口か？そんなイケずな事を呟つのは、この口かあ～？」

「あははは、ちょっと、やめてよ。分かった、分かった、あたしも嬉しい、あたしもアンタと同じ大学で嬉しいから～……つと、あつ～すいません、ぶつかっちゃって、大丈夫ですか？」

「あいやいや、すいません、杏子がぶつかってしまって、お怪我はありますか？」

「ちょっと、「美が」とじや……あ……わ、和屋先生？」

「えつ？あ、杏子ちゃん…？」

この再会は神様のイタズラか、はたまた悪魔の成せる偶然か…。いや、実際、どちらでもない。確かに、大学に入つて直ぐにこんな形で高校生の私から姿を消した旦那に再会出来たのは神様のイタズラか悪魔の偶然かのどちらかかもしれない。でも、その確率を上げた

のは、そのきっかけを作ったのは、他でもない私自身であった。

旦那が私の前から消えた日。私は心中で何度も何度も誓つた。絶対にあの人がいる大学に受かってやる、どんなに頭の良い学校だろうと、あの人がいるのなら受からなければならぬ。

恋する事を初めて知った当時の私はとても純粹だった。ただ、もう一度あの人に会いたくて、ただ、もう一度あの人に話しかけてもらいたくて。

意地つ張りな私は、旦那の家に行くなんて事は出来なかつた。家も知らなかつたしね。だから、旦那が通う大学に自分も通うようになれば……。

確率は天文学的数字になるかもしない、いや、もしかしたら、確率の世界ではかなりの高配当で出逢えるかもしない。

私はそんな思いを重ね重ね、七草大学に受かるよう勉強をした。時間が短く、投げ出そうと考へたこともあつた。だが、その都度、聞こえてくるのだ。

『結婚しよう』

旦那が言つてくれたあの言葉。もう、あの人は忘れているかもしない。実はただ最後の最後で冗談を言つただけかもしない。そんな思いが頭を過るが、結局、当時の私は投げ出した参考書を机に戻し、黙々と勉強の続きをするのだった。

そして、遂に、遂に当時の私は愛しの旦那と再会した。時間にして数ヶ月。だけど、当時の私は、もう何年も何年も会つていよいよな錯覚に陥つた。

「えつ? なんで、なんで、杏子ちゃんがつちの大学に? す、推薦の大学は……?」

「えへへ、『めんなさい、先生。推薦の大学…蹴つちやつた!』

「けつ、蹴つちやつたつて…。せつかく、苦労して手に入れた推薦だつたのに…」

「でも、いまはその蹴つちやつた推薦の大学より、もっと頭の良い七草大学に合格したよ?」

「えつ、合格した? えつ、じゃ、杏子ちゃんは、この大学の新入…」

「先生が悪いんだからなー先生があたしにあんな事言つから…。本

気にしたんだから、あたし、本気なんだから……」

「ふえ！？ 本気？ な、何が……？」

「む、先生、殴るよ。いい、聞いてよ。も、あたしは高校生じゃないし、先生の生徒でもない。つまり、あたしと恋愛したって……」

「つあ！？ いや、いやいやいや、いや、待つて！ 待つて、待つて、待つて！ あれは、ええと、その……あつ！ 一時、そう、一時の迷いで、だから、そんな本気されても……」

「えつ？」

「杏子ちゃんも、もう大人なんだから、そこん所、ちゃんとわきまえ……ブギヤツ！？」

まあ、これが私が旦那に初めて、奮った鉄拳制裁だったかな。旦那のこのあまりにも腑抜け言葉に心底頭にきて、気付いた時には旦那の顔面に正拳突き。鼻血を放ち、旦那は真後ろにぶつ倒れる。その後の騒ぎは尋常じやなかつた、人が殺されただの、改造人間だの、過激派のテロ行為だの。

まあ、結局、旦那が大学側に根回しか何かをして、私は事なきを得るのだが、当時の私はそんな事では気が收まらない。

大体、乙女にプロポーズしておいて、冗談だなんて、本当に冗談じやない。私は旦那の家を調べて、突撃することに……。いやあ、昔の私はなんて無謀……いや、希望に溢れていたんだろうねえ。

「むつ、じじが和屋先生の家か……デカイな……」

いや、本当にビックリした。初めて旦那の家に行つた私が見たものは、庭という庭が永遠と続くかのように広がった堀と、そのかなり奥にたたずむ有り得ないほど大きな家。なんと、旦那様のお家は江戸末期から続く大富豪の家系でらしたのだ。いや、マジ、驚いたね。

「むう、こんなん、あたしだつて直ぐ建てられもんね。頑張れば、先生をお城に住まわせることだつて出来るもん」

おおよそ、大学生とは思えない言葉。勉強はそこそこ出来るようになつた当時の私だけど、社会的に経験の少ない当時の私はまだまだ心が子どもであったのだ。

「うふと、よこつしょ、つか、なんて高い壙だよ、侵入するのにも
一苦労つて……」

「いや、別に堂々とお密様として入つて頂いて結構ですが?」

「うわあつーつーあつ、あああ、アンタ誰?」

「私はこの和屋家に代々仕えます執事の中村と申します。それで、
お嬢さん、和屋家にはどういつたご用件で?」

「わ、和屋宗一郎先生に会いにきたんだ!」

「「学友でいらっしゃいますか?」

「うえつ~あつ、えつと、その、い学友つて言つたが、あの……うん
と……」

「……、分かりました。では、七草大学ちかくのメゾン・カタナシ
の201号室に行くと良いですよ。この屋敷にはここの数ヶ月、宗一
郎坊つちやんは帰つてらつしゃいませんから……」

「えつ？ なんで？ だつて、ここ和屋先生の家なんじや……」

「私の口から、それを言つのは憚れます。直接、ご本人から聞いて頂くと良いかと。それでは、失礼致します。……あつ、お嬢さんも早く行かないと警備の者がやつて来ますよ。防犯センサーが動きだしました、いまの和屋家は少々、荒れていますからね……猫が屋敷に入つただけでセンサーが動く。さつ、後は私が適当に言い訳しておきますから、行つてください」

この時の旦那の家は色々と問題を抱えていたようで、父親と折り合の悪かった旦那は、遂に家を飛びだしていた。その後も、色々と旦那と旦那の父親とはいざこざがあつたのだが、とりあえずはそれは省いておこう。

さて、和屋家の執事・中村さんに言われて大学ちかくのメゾン・カタナシにやつて來た私。あのドデカイ屋敷から、かなりグレードが下がつてボツロボロのアパート。住んでいるのは、どうやら旦那以外、誰もいないらしかつた。

「……ぼろつ。ん、201、201、201と……あつた！ 和屋宗一郎……」

ボロい階段を上がって、やはりボロい二階廊下をちょっと進んだ所にある当時の旦那の部屋。私は深く、深く深呼吸をしてドアを叩く。

「…………で、出でこない？ てつ、ふざけんな！ せつかく、あたしが
あんな遠い屋敷にまで行つて、それでこの大学ちかくのボロニアパー
トまで引き返して来たつていうのに、屋敷なつてのはどうこういっ
とだあーつーへいのつ、出でこ出でこ出でこ、出でこーいつ

「なーつーへーうるさい、そんなにバンバン、ドアを叩かなくても聞こえてるよーどなたー?」

「…ハサウエイ」

「…………誰もいらないじゃない？あん、イタズラか？」

「う…うう。ドアの後ろを確認したりや、『ハリッ！？』

「ん、後ろ？……あつ！な、何をしてるの、杏子ちゃん？」

「とりあえず、アンタがいきなりドアを開けるから、モロ顔面にドアがぶつかった所かな……」

גַּתְּנִים...

「…………」

「…………」

最悪の再会である。せっかく、当時の私がおもいきりて田那の家まで押し掛けに行つたといふのに、顔面にドアは無い。しばらく、私たちの間を沈黙が支配する。そんな沈黙の中、先に口を開いたのは田那だった。

「どうしたの、こんな夜中?」

「…………どうした? 本気で言つてるので?」

「え? ?」

「先生、あたしに言つたよな! ? 好きだつて、気持ちが抑えられな
いって、結婚……しようつて……だから、だから、あたし頑張つて、
頑張つて先生のいる大学に入つたのに! 入つたのに! ! ! 一時の
迷い? なんだよそれ、馬鹿みたいじゃん、あたし……」

「…………」

「…………」

「…………一時の迷いじゃないよ」

「つー? そう言つたじゃん! ? 大学で久しぶりに再会した時、先生、あたしにそう言つたじゃん! ?」

「いや、あんまり、突然だつたから…」

「じゃあ、結婚……して、くれるの?」

「…………『メン』」

「なんで! ? 一時の迷いじゃないんでしょ? じゃあ、あたしのこと好きなんでしょ? あたしと一緒に居たいんでしょ? だつたら、あたしと! …」

「俺の家で…………」

「えつ？」

「俺の家は三代々、金持ちの家系なんだ。でも、俺はそれが嫌いだつた。父親は何が楽しくて、働いているのか。家庭をかえりみず、金、金、金、金！－それでも、実の父親だからさ、我慢してた。いつか、分かってくれる。いつか、振り向いてくれるつて…。キャッチボールもしたことの無い、親子なのにだぜ？それでも俺は親父に父親を期待していたんだ」

「それと、結婚出来ないと、どう関係あるの？」

「あるよ。ここ数ヶ月前、うちの会社が大きく傾いたんだ。他のデカイ企業が昔からふんぞり返っている和屋家が邪魔に感じたらしくてさ、いわゆる、潰しつつやつた。ははっ、会社じゃない、屋敷にまでバンバン電話が鳴りっぱなし、かなりヤバい状況だつたかな。そして、悪いことは続くもんで、今度は母親が倒れたんだ。まあ、精神的にかなり参つてたらしくて。それでも、入院をしないとならない位、重病で……」

「……」

「ここからが本題さ。入院した母親は、ご飯も食べずに、どんどんやつれていってさ。だから、俺は倒れた母親の見舞いに来て欲しいつて、ちょっとでも顔を見せるだけでもいいって親父に頼みにいつ

たんだ。そりや、会社が傾いて忙しい時期だって分かつたけど、父親なら、夫ならさ、普通は少しでも会いにいくはずだろ？でもさ、ははっ、そん時、親父はなんて言つたと思つ？

「なんて言つたの？」

「『役立たず』に用は無い』ってさ…。ナニで、俺はキレちまつた。気付いたら、親父の襟元を掴んでボコボコにしてた訳だ。親父は血まみれ、警備員は騒ぐは、執事たちは俺のことを怖がるは…」

「……やつぱり、分かんない。なんで、それで、先生があたしと結婚出来ないって事になるの？」

「俺にもあんな親父の血が流れてるから。しかも、俺は親父を血まみれにしたんだぜ？きっと、俺もあんな風に君を傷つける。家庭もかえりみないで、夫らしいことも、父親らしいこともしないで…。都合が悪くなつたら力に飽かせて、君や子どもたちを傷つけるに決まつてゐる。俺は怖いんだ。せっかく、作った幸せを自分の手で壊すことが……だから、君とは結婚できない。いや、俺は誰とも結婚をしない……」

当時の旦那は、父親を求めた所を裏切られ、そんな父親を自分の手で傷付けた事に後悔をし、重度の人間不信に陥つていた。可哀想なことに、明るく振る舞う中で心で哭いていたのだ。とても、切なか

つた。『口一と私に『自分はまともじゃないからさ』と笑いかけている当時の田那。それを見て当時の私は、本当に心が締め付けられる思いになつた。

「いいよ…」

「えつ？」

「和屋先生……うんうん、宗一郎さんが夫らしいことが出来なくて、父親らしいことが出来なくて、それを力に飽かせて正当化しようと/orしても、あたしはかまわない……」

「そんな、かまわないわけ…」

「だつて、宗一郎さんがそんな腑抜けた事をしたら、あたしが逆に『顔面に一発』入れてやるもん！」

「……はつ？」

「『プログラリストだつて、巩固めだつて、フランケンシュタイナーだつて、投げっぱなしジャーマンだつて、バンバン大技をかけてやるもん。大丈夫、あたし強いもん！宗一郎さんなんて、力づくであたしの言いなりにしてあげる！それに…』

「それに？」

「あたしには分かる！あたしと宗一郎さんとなら、いい夫婦になれるって分かるもん。だって、だって、貴方は、あたしが好きになつた人だから！！」

確して私の旦那捕獲作戦が実行されたのだった。大学でのストーカー行為……もとい、ラブアタック！は当たり前でボロアパートに押し掛け女房や夜這い行為まで！！

結局、私の既成事実作りに旦那が観念して私たちは付き合つこととなるのだが……まあ、そこら辺は、さらに次回に続く（笑）

第10話・話進みて、寿司オヤジ（前書き）

途中、（訳：）など文章がかなり読み難くなっていますが、一応必要な物なので、勘弁のほどをお願い致します。申し訳ございません。

それでは、本編へどうぞ。

第10話・話進みて、寿司オヤジ

遂に私は旦那のハートを射止めてやった。人間不信になっていた旦那を口説き落とし、大学でのラブストーリーが始まったのだ。

「ふんふんふん、ふふん

「「」、機嫌だね、杏子ちゃん？」

「ええ～? だつて、ねえ～? ……あつ、待つてね?・すぐ」飯作るから」

「いや、うん。…と、いうか、俺、自分で自炊出来るし、別に毎日毎日、ご飯を作りに来なくても良いよ?」

「遠慮しない、しない! あたしが作りたいの! 未来の旦那さまの! 飯だもん!」

「そつ、そづね…」

毎日毎日、田那のアパートに通つては手料理を奮つてあげた。まあ、料理なんて生まれてこのかたやつた事の無かつた当時の私な訳で。母親から教わつて作つていたものの、不器用な私の作った料理の味は想像を絶する物だつたに違ひない。良くもまあ、田那もその全てを完食してくれた物だと今でも感心している。愛だね、愛。

「えつ？ あんたマジで和屋センパイと付き合つてんの？」

「うん、毎日、手料理を作りに行つてゐるんだあ～」

「毎日つべ、夕飯でしょ？ 夜でしょ？」

「うんー。」

「うんーつて、あんた。マズイわよ、あんた変なことわれてないで
しゃうね？」

「てか、もう…ねえ？」

「いや。もう、ねえって言われても、あんた……。だって、いい加減男だよ？部活でも、ぐうたらしてるし、狭間センパイとは何かオタクな会話してると、単位は取れてるみたいだけど、あれだよ？髪の毛ボサボサで厚底メガネで秋葉原みたいな所を徘徊してるような男だよ？」

「よ、要は仁美はオタクが嫌いなんだね？」

「あんたもそうでしょ？中学の時、クラスのオタク野郎を見る度に絞めてやつたの覚えてる？高校の時だって、あんなの見るだけで蹴りが飛ぶ杏子だったでしょ？」

「むひ、昔は昔だよ」

「……」

「あの、仁美？……えっと、その……むひ、昔は昔だよ。」

「…………はあ、まあ、杏子が好きになつた人だからねえ。仕方ないが、幸せにね？てか、あの男が裏切つたらまず私に言いなさ

い、懲らしめてやるから。それから、別れたい時も言つのみのう。後腐れなく、『三』に出してあげるから。」

「『三』に置いて……」

「で、あんた家族には言つたの？ 特にあの頑固なお父さんは話しあんでしょうね？」

「モツ、モチロンダ三……」

話せる訳が無かつた。我が父親は昔氣質の頑固一徹を思わせる堅い人。仁美が言つたように当時の旦那は髪の毛ボサボサのビン底メガネ。紹介しようにも、出来る訳がない。

家庭教師として面識のある母親と妹には会わせる事は出来るが、そこから漏れないとも限らないので家族全員に内緒。ちなみに、何故に父親が旦那と面識がないかといふと、前も話した通り父親は寿司屋なので朝イチから河岸に魚を買いに行き、夜遅くまで店で寿司を握っているので、夕方に来て夜には帰る家庭教師時代の旦那とは母親から話しに聞いても会つことが無かつたのだ。

そして、もし家庭教師時代に2人が会っていたらならば、あんな事件も起こらなかつたかもしれない。

あんな事件。それは、私と旦那が付き合い始めて約2年の歳月が流れた時の話だ。

「ねえねえ、杏子お姉え。彼氏が和屋先生だつて本当ですか？」

「ぶつ！？いつ、いきなり何！？」

この妹の食卓でのいきなり発言が事の発端であつた。

「いや～、昨日、偶然に和屋先生と会つてしまつてえ。おかしいと思つたですの。2年ぐらい前から、いきなり、お姉えがママに料理を習い出したり、いつも散らかしつぱなしだつた部屋を自分で片付けてたり。これは、なあ～んかあるなあとついていたら、ズバリですの」

「ぐつ、あんた、また探偵！」として、あたしをつけ回したな！？」

「「「」」」ではなく、探偵ですかの」

「んな事ぢつでもここつ……重複なのは……」

「和子がどしゃん（訳…じんな）男と付き合つどるか、が重要たい
一…」

「こや、お父さん。あのね、別にね…」

「和屋先生? 何ね（訳…何だ）、その和屋先生つて言つとはー?（
訳…言つのは）教師ね、教師と付き合つどりとねー?（訳…付き合
つてじるのかー?）」

「あらあ、和屋先生つて言つたら和子が高校時代に付いて貰つた家
庭教師の先生じやなこ?へえ~、やるじやなこ!和子ちやへん」

「和さん…あのね、お父さん、宗一郎さんはね…」

「宗一郎さん…?」

「宗一郎さんですか？」

「あらまあ、宗一郎さんですって。まあまあまあ、今日はお赤飯が良かつたわねえ」

「母さん！じゃ、なかつた。お父さん、あのね、和屋さんはいい人で、頭も良くて、七草大学も適当にしながらも卒業なんか出来てるし……」

「適当つー？？」

「あつ！いや、別に和屋さんは適当な人じゃなくて……」

「なるほど。お姉さんが高校の時、推薦が決まった大学を蹴ったのも、そうまでして七草大学に入学しようとした事も、おかしいおかしいとは思つていまつたが。なるほど、なるほど、七草大学に和屋先生がいたから、あんなに必死になつて勉強してたのです〜？」

「まあまあまあ、じゃ、杏子ちゃんが高校生の頃から？まあまあ

あ、やつぱり、お赤飯作りなくちゅー…」

「あ～、もう一・九・じゅなくちゅー

「…ね」

「なつ、なに、お父さん…」

「明日、その男をここに連れて来い！良かねー？（訳：良いな）」

さあ、大変な事に。そんな事を急に言われたってこいつはまだ心の準備が出来ていなかつたし、旦那を着飾る時間もないと来たもんだ。再会した当時の旦那はオタク文化に毒されており、普段からオタクなスタイルでいるため、父親に会わせるなんて無謀としか言い様がなかつたのだ。

しかも、大学も卒業出来、就職先も決まり、春休みを満喫中の當時の旦那は私が知る限りで今まで一番、最悪のスタイルだった。親友の狭間センパイと同じ格好であちらこちらと変な所に渡り歩き、も

はや、百年の恋も冷める勢いだった。……まあ、それでも、呼び出したんだけどね。

「なんでそんな格好なのーー？」

「いや、そんな急に呼び出されたから。これでも、一応、服は着替えて来たんだよ？」

「むう、ボサボサ髪の毛は後ろに縛るとして……なんでメガネーー？ ノンタクトはーー！」

「それがどこにも無くて、探したんだけど……」

「もおー、どうすんのさー？ あたしのお父さんは頑固だつて言つたじゃんーー？ うー、別れなんて言われたら、どうしよう……」

「大丈夫、信じて！」

「信じられないよーー！」 うう、でも、もうこれで行くしか……

「杏子？店先で何ばしよつとね？（訳：何をしている）はよ、入らんね？（訳：早く、入らないか）店の中からお前の姿が見え……」

「おっ、お父さん……わつ、なんでいきなり？あの、あのの、これがわたしの付き合つている人で、家庭教師をしてくれた人で、あの、和屋宗一郎さんって言つて……」

「じうも、和屋宗一郎です。お父さん、挨拶が遅れてしまつてどうもすみまつ、ぐはつ！？」

「ふえええつ！？なつ、なななな、なんでいきなり、宗一郎さんを殴る訳、お父さん！？」

「せからじかつ！…（訳：つるむたこ！…）娘をくれてやるのは、男の中の男と決まつとつと（訳：決まつてこる）！彼氏が出来たて言づけん、どんな男か期待しよつたとに…。」（訳：こんな）、優男にくれてやる物は塩でも無かつ！…（訳：くれてやる塩をえもない）」

この時ほど、父親との血の繋がりを強く感じた事はない。父親の無遠慮かつ、暴虐な鉄拳を喰らった旦那は、やむ無く父親と会話することなく帰宅する。その後、旦那と父親が会見つことは無かつた。そして、2人が次に会見つこととなつたのは、結婚の挨拶の時だつた。

「…………」

「…………」

「（ねえ、パパと和屋先生…2人向き合つたまま全然喋らないですの…）」

「（うう、やっぱり、2人だけににするんじゃなかつた）」

「（…………大丈夫よ、きつと…………）」

「（きつとつて、なに？きつとつて、母さん？）」

「（一番危ないのは、あそこにある昔から飾つてある名刀・右京一文字です。パパがある有名な刀鍛冶に特注で作つて貰つたやつです。確か、値段は国宝級。ですから、一度も人を切つた事は無くて、切れ味は、それなりに…ですの）」

「（まつ、まさか…）」

「それで？」

「……先ほども言つました通りに、娘さんを頂きたく参りました」

「……最初に会つた時よりは、幾分かマシな着物を着とるばつてん（訳・着ているが）、中身はどうやんかね。（訳・中身はどうだるうな）」

「お答えしかねます。俺は、中身も無くて見栄えも悪い。直ぐに忘けるし、服装だって適當です。お父さんの言つ、男の中の男とは程

遠い。……しかし、和子さんを通り抜けたり、誰にも負けません

「誰にも……だと……」

「はー。」

「貴様、俺よりも和子の事を思ふるとでも思ふのか!?(訳:思つてこると和子の事か!)」

「……はー。」

「ああまーつー。」

「(あわわわ、パパが刀に手をつけましたのですねひやあーつ、刀身を抜いてしまったのですねーつー。)」

「(えい、ひよー、宗一郎さん?逃げつ、逃げて、逃げてつー!?)

「へ、いつなつたら、あたしが行かなきや…」

「（大丈夫よ、杏子ちゃん）」

「（お母さん、どうが!? 大丈夫じゃなによ、刃先を宗一郎さんの田の前に突き付けるんだよ…）」

「貴様、俺から杏子を無事に奪えるで思つなよー…」の刀のサビ

…」

「片腕でも、片足でも、差し上げましょー…」

「なにこ～つー…」

「こ～くら切られたとしても、俺は娘さんを連れて行きます。もはや、
彼女は俺の一部だ。彼女が居なければ、俺は生きてはいけません。
だから、彼女を失つくらいなら、腕や足の一本一本……惜しくは無

い！…たとえ、例え、首だけになつたとしても、俺は杏子を愛して、奪つてみせます！！

「ここガキヤああつ…なら、望み通り、貴様の首を…」

「待つた…！」

「つー…母さん邪魔ばせんでくれ…俺はここつば、叩つ切るけん…」

「そんな事をすれば本当に貴方の負けです」

「なにい～つ…？」

「彼は首だけになつてもと言いました。つまり、彼が生きていようといまいと、杏子が彼と一緒になる事は免れないという事です。むしろ、彼をここで首だけにしてしまえば、杏子も彼の後を追い、首だけになつてしまつでしょう。杏子を不幸にする事は貴方の本意では無いでしょう。」

「んぐっ…」

「彼が杏子を思ひ覚悟を見せた所で貴方の負けは確定してしまったのです。もう、誰にも2人を止めることは出来ませよ? ねつ、あなた?」

「……」

「あなた!!」

「くっ……す、好きしきつ……ぱってん、（訳：しかし）貴様！杏子ば泣かしたり、裏切つたりした時は……覚えておけよ!」

こうして私と旦那は親公認で結ばれる事になる。その日から去年の6月までせつせと結婚の準備をして、そして、めでたくゴールイン。相も変わらず、旦那はオタクだけれど、愛は常に私の方に向いているとその時の私は信じて愛を誓つたのだった。

さて、途中途中、省いた話はあるけれど、とりあえず、これが私と旦那の昔話。

大好きで、愛して、信頼して。それでもって、憎らしい田那様。本当に、もう嫌になってしまつ。消えない思い、消したくない思い。後から後から沸いてきて、本当にどうしようもない思いがここにある。だから、私は今も昔もずっとこれから、田那に恋をして生きていくんだろう…。

：：：：：

「…ぐすり」

時は土曜日、お昼過ぎ。私は今朝から出掛けている田那を待つている所だ。そして、ちょっとした事に、ナーバスになり戸棚からアルバムを引っ張り出して昔の事を思い出していた。

「もつ、お昼過ぎだ。田那、帰つてきちゃつ…」飯作りなきや…でも、帰つて来ない…よね?」

だつて、今日は旦那の携帯電話のスケジュールに書いてあった、浮気の日なのだから…。

『アイミちゃん、ハート』と書かれた携帯電話のスケジュール。それを見た私は直ぐさまソレを叩き折つてやろうと携帯電話を振り上げた。しかし、結局私には出来なかつた。

旦那がオタクなのは我慢出来た。あまりにも多すぎるマンガで1部屋潰れているのも、フィギュアの群れが私たちの寝室にまで侵入してきた事も。休みの日、デートもせずに溜めに溜めたゲームやアニメを見ている事だつて。さらには、デートをするにあたつてそのデートの場所が何かオタク系統のイベント会場であつても我慢出来た。

しかし、しかしだ。流石に、そんな私でも浮気には…。もつ、涙を流しその場に座り込む他、どうしようも無かつた。

鼻歌まじりでお風呂に入つてゐる旦那。携帯電話を握りしめ、そんな旦那のいる風呂場を見る私。この書かれたスケジュールについて聞こつか、聞くまいか。もうすぐ、旦那がお風呂からあがる。聞こう。聞いて殴つて、許してやろう…。

『ふう～、いいお湯でした～と。ん？どうしたのね？』

『えつー～、うう～、うう～…何でもない…何でもないよ、うう…』

…』

『…ふーん』

いつもの私なら、間髪入れず殴つているはずなのに、何故か私は何事もなかつたように夕飯を作っていた。今思い出しても情けない。動搖、していたのだろうか？その日から私は田の顔が真つ直ぐ見れず、ぎこちなく過ごしていた。そして、遂にその日がやってきたのだ。

「田の浮氣…か」

切ない。苦しい。悲しい。寂しくて淋しくて、嫌になる。今から田那の居る所に、いつて浮氣をしている所を押されて、その浮氣をしている女の田の前でボロボロにして……

と、そこまで考えて、ため息が出た。いくら考えた所で体が動かない。言い様のない脱力感が私を襲うのだ。刻々と時が進み、私だけが置いてきぼりにされる。…本当に、本当に切ない。

「浮氣つて、何ね？（訳・何だ？）」

「浮氣つてこいつのせ、田那が他の女と逢い引きをして……ん？つて、おつ、おおおお、お父さん！？」

「杏子、浮氣つてこいつのせ何ね？（訳・何だ？）浮氣ひとつね（訳・浮氣つてこいつのせ何ね？）、宗一郎くんは？」

「こやつ……こやつ、こやつ、こやつ……してない、しない、しない……宗一郎さんが私を置いて他の女と浮氣なんて……てか、お父さんどうして？」

「お前の顔ば、見に来たつた。だけど……もうね、浮氣ひとつね？（訳・していのなんだな）……あん（訳・あの）、ろくでなし
がつ……。」

何? 何なに、この展開! ? 何ゆえに我が父親が私の家に? てか、今
の一人言聞かれた! ? ヤバい、旦那……殺される! ?

むかし、昔、とある所に1人の男が居りました。その男は古くより続く武術家の家系の嫡男で、その家は武術家とは名ばかりの『任侠』を重んじる極道の家の一族なのでありました。なので男は、やはり凶暴で、悪という悪をやり散らかして、それはそれは立派なヤクザが一匹、出来上がりてしまったのでした。

『赤松の白竜』

人はその男をそう呼び恐れ、男は人にそう呼ばせ、それはそれは恐ろしい悪魔へと変貌していつたのでありました。

男は何より戦いが好きでした。特に血が飛び交うような戦場のような戦いが大好きでした。白竜の名の下に白いスーツを着込んで、日本刀を片手に、幾度となく敵対する暴力団関係組織に喧嘩を売りに行き、そして、帰る頃には、その着込んだ真っ白であつたはずのスーツをどす黒い色のスーツに染めて、ほくそ笑むのが彼の日課であります。幾度となく繰り返されるそれは、街をも巻き込む大事件となり、街は血で血を洗う地獄と化していつたのでした。やがて、その抗争は男の配下に付く敵組織といつ王者の図が出来上がり、街は文字通り、男の支配下に置かれてしまったのでした。彼が仕切る街は惨然とし、誰もが暗い影を落とし、下を向いて生きていくしかありません。もはや、男を止める者は居りませんでした。もはや、この地獄を救う手だけは、ありはしなかったのです。

そして、数年後：

男は組織の跡目を弟に譲り、ヤクザをやめたのでした。

何故、男が急に巨大な組織のボスをやめたのか、それは組織の誰にも分かりはしません。ただ、見つけたのです。男は見つけたのです。金より、力より、権力よりも、大切にしたい『極道』を、彼は見つけたのでした。

：：：：：

「それで?どうに困るとね、あの男は?」

ああ、まずい。いや、本当にマズイ事になってしまった。新婚さんである和屋 杏子は思った。確かに、確かに、旦那は浮気と思わしき疑いのある事をしていた。携帯電話の予定表なんかに『女と会う』なんて約束事などを書き込んでいたが、だが、そ

れは真実なのか？

今になつて嫁である杏子は、とある不安を抱えて考えこんでいた。

「カーネーション！？ あん（あの）、男は、杏子ば、嫁に貰い來た時に、何んて言つたか、忘れた訳じやあるまいなあつー？」

何やら、細長い物を入れた唐草模様の布を振り回しながら、和服を着こんだ初老の男・杏子の父親である柏木 竜ノ丞かじわき たつのじょうは怒り心頭であつた。それを横目で見て、娘である杏子は、ズササーッと自分の頭から血の気が引いて行くのが分かつた。あ、やばい… ヤル気だ、この人。

もちろんの事、旦那が本氣で浮氣なんかをしているものなら、それは嫁としては許せない。いや、もはや、許す許さないの問題ではない。命を絶たせるか、させないかの問題である。……現実的には冗談であるが、そういうくらいの気持ちなのである。が、だが、彼は違う。この、自分の父・柏木 竜ノ丞は、違うのである。

その手に持つた唐草模様の細長い布端。たぶん、それは日本刀。中身を出せば悪即斬の武士の武器。彼は、やるだろう。必ず、実行するだろう。自分と同じ血。いや、それよりも濃い血を持つ父は、旦那が浮氣をしている現場を見たものならば……

「杏子つ…」

「ふあ、は、はいっ！？」

「もはや、彼奴めを追うことは無いな！？ 裏切り者に対して、お前

も令語をかけて迫つ」となんぞ無ことわづ――」

「アハ、ニヤ、ウの…、おとひへ、ウニヘ。」

「今度の我が皿皿の刀……およここと斬れ倒さるもあじれんなど…」

（ああ、やばい。時はまだ回過れ、なに今度なんてこいつへんと
よみよみ……）

ひたすら、胸ナ心の中では那が無実であることを願ひまかりな
のであつた。

第1-1話・唐草模様（後書き）

こんには、久しぶりの更新です。なんとかまだ頑張って書いております。

さて、和屋家のお嫁さんの父親・柏木竜ノ丞。前半のパートで何やらきな臭い話が書いてあるのですが、この後どうなる事やら…例によつてアイディアはありません（笑）
…どうしようつ…

オタクにはオタクにしか分からぬモノがある。いや、そのオタクの中でも同じ種類の仲間でしか分かれぬモノがある。例えば、『鉄』だ。鉄道マニアである彼らにも、種類がある。物体そのものに興味がある者、その中で、その走る姿、停まっているフォルム、写真、中身、乗ることに興味があるもの、そして、その物体でなく時間、つまり時刻表などに興味をそそられる者など、人それぞれである。本物ではなく、ミニチュアなどに魅入られた者や、天命を終えて廃車となつた車両の部品などを集める者たちも居るのだから、それはもつ、オタクという一言で定義・肯定するにはあまりにも趣味・主張が枝分かれしているのである。まあ、マニアとオタクを同じに位置付けるなど、各々方面から「意見が来そうだが、趣味に集める執念は同じことである。

「それで、なにが言いたいのですか、阿久津くん？」

「ですから、どうやらその理論から行くと俺と部長のお義兄さんとは、同じ趣味・主張の者らしいのです」

「言いながら阿久津は、尾行する和屋家の旦那が向つ方へと指をさす。

「つまり、お前も『猛乳娘』が好きと……!?」

バギリと部長・柏木七海は手に持っていた袋を握り潰す。

「はわあつー？」

それに、阿久津が声にならない声で魂の叫びを叫ぶ。何故なら、七海が握り潰したそれは、さきほど阿久津が買い求めた幻の同人ゲームであつたからだ。

和屋家の旦那と偶然に接触してしまった阿久津。当夜。彼と和屋家の旦那との一連の会話を聞いていた七海が『そのゲームつてそんなに面白いものなんですか？ちょっと、見せてください』と言つたので、阿久津は彼女にそのゲームを渡していったのだ。最初は、パッケージに未成年にはあまり好ましくないイメージが描かれているので、阿久津も渋っていたのだが、にっこりとその可愛らしい笑顔で『先ほどの私のストレスを阿久津くんで発散しても良いのですけど？』と脅された日には、阿久津も渋々とゲームを渡すことしか出来なかつたのであつた。

まあ、予想通り、『なんですか、このゲームわつ？』、『大変です！？いえ、変態です！？』などとさんざん喚き散らした後、『旦乳ばつかりです……むづつ……』と、そのゲームをどこぞに投げ捨てようと振りかぶつたので、話題を変える為に自分が七海の義兄と同じ趣味の人間であると阿久津は別の話題をと切り出したのだが、結局、ゲームは怒つた七海に握り潰されてしまったのであつた。

「で、巨乳が好きな阿久津君？お義兄さんと同じ…が、何ですか？」

やや不機嫌気味に七海が、潰れた幻のゲームに涙を流す阿久津に先ほどの言葉の意味を問う。と、それに涙を流していた阿久津がビクリという大きな反応を見せる。なぜなら、聞く七海の視線が尋常では無いからだ。冷たい。どこまでも冷やかな視線で阿久津を凝視する七海。

「いや、別に巨乳が好きな訳じゃ、いや……」

「…………」

「……？」

幻のゲームを壊されて意氣消沈の筈の阿久津なのだが、そんな事には構つてはいられなかつた。どうにか、しなければ……。この部長、この帝王の、『機嫌を取らなければ……自分は死ぬ。決して大げさでは無かつた。この七海の冷やかな瞳は語つている。『オマエガ、キライダ』と……

「お、俺はむしろ、あつちやいのが好きです」

「……」

「……」

「……」

無言。冷やかな視線と冷たい空気が阿久津を襲う。

(くつーつまだだーまだ、あきらめちゃだめだーー)

しかし、そんな冷たい雰囲氣にもめげずに、阿久津は不屈にもさらに言葉を繋げる。

「ふ、部長ぐらいのが俺は好みです。有るよつな無いよつな……『つるべた』なのが、俺は」

瞬間、阿久津の顔が真っ赤に燃える。

(あれ?なんだ?これ?あえ?あえあえ?)

声が出ない。言葉が出ない。咽がからつからに干からびていく。ごくりと唾を飲み込むものの、それでは咽は潤わない。どきどきと動悸が息苦しい。天才・阿久津と呼ばれた頭脳の思考が停止する。名探偵・阿久津。スペコン（スーパー・コンピューター）ブレイブ頭脳・阿久津。呼ばれたあだ名が廢るほどに思考が働かない。代わりにドーパミンが成りアドレナリンへと変わり、動悸を激しくする。

「…つまり、私が貪乳だと、阿久津君!-?」

「-.-?」

ああ、終わった。真っ赤に燃える顔が、真っ青に冷めて、阿久津当夜はしつかりと己の最後の時をその明晰な頭脳で感じ取ったのであつた。

第1-3話・ヤバい予感？

アニメやゲームの世界を現実の世界に持ち込む者がいる。それが、少年少女ならば世間は文句を言つまい。では、それが大人ならばどうか？大人がコスプレをして憧れのヒーローになつていたとしたら世間はどう思うだろう。大人が、魔法を使えるんだと言つているならば世間はどう思うのだろうか…

「どう思つ？」

「別にいいんじゃない？他人に迷惑をかけなきや？」

そう、たぶんそれは良くも悪くも、その人次第である。趣味を保つ人が居る一方で、犯罪に走つてしまふ人もいる。要は、どうあるかが問題なのだ。

「まあ、奥さんにコスプレ強要するのは、犯罪だよな？」

「こつからー？」

ただの変人なのか、子供のころの思い出が忘れないだけなのか…。きっと、この時代が重なることに増えていくだろう。ゲームを忘れられない大人。アニメを手放せない大人。

「うーん、俺は止められないなあ… 50になつても…」

「そこはやめとけ人として…」

「…いや、お嫁さんへのコスプレ強要の方じやないよー!？」

「なんだ…」

「…」

本来は子供向けである筈の娯楽を手放せない大人。だが、それは問題ではないのだ。面白いものは面白い。子供向けだつて、大人はむかし子供だつたのだ。大人になるに連れ、そういうものが需要で無くなつていく人もいる。

でも、逆に必要になつて来る人もいる。それが、現実。では、そん

な世の中、彼ら、または、彼女らはどうあるべきか？

「和屋クンは、どう思うのかね？」

「ワタシは、世間の言つ所の問題を起こさなければ多少の自由は良いかと思うよ、狭間クン？」

「ほう？」

つまりは、夢を忘れずに現実を忘れずに、節度ある行動を…ということ。働いて、アニメ見て、働いて、ゲームして、働いては趣味をする。コスプレしたって、成りきったって、趣味だもの。社会のルールに大きくはみ出さず、犯罪に手を出さなければ、ちょっとやそつとは自由なのだ。大人が子供の玩具で遊んじゃいけないなんて法律は無いのだから…。

「まあ、最近は大人向けの玩具がいっぱいあるけどね…」

「狭間クン、それ言葉がなんか危ないよ」

：：：：：

さて、どうしたものか？和屋家の旦那を尾行していた、その義妹。

柏木 七海。先ほどから見ていると、何やら姉の旦那は友人と、ゲームセンターで待ち合わせをし、二人並んでアーケードゲームをしている模様。しかも、そのゲームをしながら何やら意味不明な会話を繰り広げていた。

「…あ、阿久津くん…か、解説を…」

七海は先ほどボコボコに殴つて、ぐんにゅりとゲームセンターの

一角でうな垂れている阿久津 当夜に今の会話の通訳を促す。

「……ぐふつ……」

しかし、もはや風前の灯の阿久津は痛々しい擬音と共に落ちていった。

「ああ、もう。役立たずです」

更なる問答無用の無能のレッテル。阿久津の口から再び痛々しい擬音が放たれる。

「むう、見えませんねえ……お姉えの言つには、今日、お義兄さんは浮氣相手と会うはずなのに……なぜ、ゲームセンターなんかに来たのでしょうか?」

もはや完全にボクサーもびっくりのグロッキー状態の阿久津だが、七海は無視してゲームセンターの奥に居る義兄の様子を伺う。

ゲームセンターといつ場所は特殊な場所。特に、ある一定の人には好ましくない一面のある場所である。

「尾行は、ややアレでしたが… まだ完璧です。なので、お義兄さんが女人と出会つ場面はまだないはずです… やはり、腑に落ちませんね」

そう、七海の義理の兄である和屋 宗一郎は、まだ浮気相手である女性とは接触してはいない。そして、今日出会つという姉の言葉を信じれば、この後その問題の浮気相手と出会うはずなのだ。なのに、何故に、和屋 宗一郎は、ゲームセンターなんかに訪れたのだろうか？

この後のイベントを考えれば、男子たるものにこうした行為は避けなければならないはず…。ゲームセンターとは即ち、立ちこめる匂いのする場所。つまり、多かれ少なかれ、タバコの匂いという異臭が服についてしまう場所なのである。

「女性と会つとこつ時、わざわざタバコの匂いを付けていく馬鹿が居るのでしょうか？喫煙者ならともかく、お義兄さんは、そういう類は吸いません」

ならば、尚のこと、そのクリーンなイメージを押し出すのが恋愛

の定石では無いか？もしや、相手はタバコの匂いが好きな女性？いや、しかし、それにしてもあのオタク丸出しの恰好でタバコの匂いがする男を待つている女性など…

「…ぐふつ、まあ、いまから起ることを見ていれば分かるんじゃないすかねえ？部長…」

と、そんな謎が謎を呼ぶ意味不明な義兄の姿を見て、阿久津がゲームセンターの入口付近を指差す。その阿久津の指さす方向を見て七海は驚く。そこに居たのは、紛れもなく柏木 七海の

「あれ、部長のお姉さんでしょ？？」

「パパー？」

「ぐふええいー？」

予想外の七海の言葉に、芝居がかつた血反吐の擬音を思わずただの噴き出しにしてしまった阿久津。だが、そんな、阿久津の事など

構わず、七海はタラリとその額から一筋の汗を流す。

ゲームセンターの入口付近。そこに居るのは和屋家の旦那の嫁・和屋杏子。旦那の携帯追跡システム・GPSで場所を特定したのだろう。きょろきょろと旦那を探して辺りを見回している。そして、問題はその隣にいる人物。姉がやや青い顔をしているが、手に取るようになんかの細長い形から、もはやそれが何であるか七海は想像できるが、その細長い形から、もはやそれが何であるか七海は想像できていた。ああ、場合によつてはとてもマズイ事が起きる。七海は、未だ青い顔で辺りを見回す姉の隣で、憤怒の表情で唐草模様の布切れに隠した凶器を振り回している実父を見て、そう思わざる居られなかつたのであった。

第1-3話・ヤバい予感？（後書き）

何やらひ述べてあります、流して貰って結構です（笑）

さて、メンバーが揃つて来ました。旦那とその友人。七海と阿久津。そして、杏子とその父親・柏木竜ノ丞。何やらヤバい予感？

…未だ、続くアイディアは無し。何やらヤバい予感？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439d/>

旦那様は、オタク様！？

2010年10月31日01時42分発行